『年報人類学研究』第 9 号（2019）
Annual Papers of the Anthropological Institute Vol.9 (2019)

自分史のなかに書かれる老い
――沖縄県の高齢者向け自分史講座を事例とする人類学的研究――

菅沼　文乃

キーワード
自分史、老い、沖縄

１．序論――現代日本社会における自分史の展開と本研究の目的

世界規模での高齢化が予測される現代社会において、老いは衰えや社会問題というネガティブな印象と合わせて語られることが多い。一方、いかに老いに抗するか（アンチエイジング）、いかに老いを充実させるか（サクセスフルエイジング）、生産的・活動的な老後を実現するか（プロダクティブエイジング）という、老いの不安に対抗するような言説も関心を集めている。そのようななか、自らの老いを積極的に振り返り、文章作品として綴る、自分史という試みがある。

自分史とは「自己の経験や人生が書き綴られたものを包括し、個人が自身であらわす『伝的書き物 autobiographical writings』」（小林 2017: 493）である [1]。同義、あるいは類似のものとして手記、自叙伝、人生史などがあげられるが、総じてある個人が自己の経験をふりかえり、整理し、記録するという過程からなる、自らの人生全体を語る文章作品であるといえる。

自分史という語をはじめて用いたのは、歴史学者の色川大吉である。色川は歴史書の“客観的”記述において書き手の超越的立場を疑問視し、個人史の積み重ねから主観的な歴史を検討するというアプローチとして、1960 年代末に始まっていた橋本義夫による市井の文章運動である「ふだん記」運動 [2]を参照する自分史を提案した（色川 1975, 1992）。

1975 年に色川が『ある昭和史――自分史の試み』を発表してまもなくの、自分史という活動が一般に知られた最初期に書かれた自分史の書き手の中心は、当時 70～80 歳代の男性であった。彼らによる自分史は、激動の昭和時代を乗り越えてきた自らの人生の記録を

---

[1] 自らの経験を自らがストーリーとして文字記録にまとめる自分史に対し、口述で述べられた語りから研究者とストーリーを引き出すのがライフストーリー研究である。後者は、研究者が口述者との対面的相互作用の末に編まれているという性質上、口述の段階で研究者が関与するため、研究者の視点がその口述資料のなかに反映されうる資料であるといえる。

[2] 市井の人々が自らの思い出や生活の記録を文章とし発表する場の創出を目的とする学習活動であり、戦前の「生活綴り方運動」、戦後の「生活記録運動」を継承するものとして位置づけられる（小林 1997: 42-53）。現在は日本各地にふだん記のグループがあり、ふだん記誌の発行や交流会を実施している。

書き残そうとするものが多く、とりわけ戦争の経験は多くの自分史で取りあげられた。青年・壮年期の戦場での経験や戦闘体験の描写からは、戦争に翻弄された時代を生き延びてきたことの証として自分史がまとめられたことがうかがえる（小林 1997: 56-64）。とはいえ、自らの人生を時系列的にまとめあげるだけでなく、自費出版することを目指す自分史は、当初はハードルの高い趣味活動として認識されていたようで、自分史が提唱されてしばらくは「年老いて時間的にも経済的にもゆとりのある人が自分史を書くものだ、という生涯学習のひとつの固定観念」（杉座 2017: 14）があったことが指摘されている。

しかし自分史の自費出版へのハードルは、1984 年に福山琢磨が設立した「自費出版センター」を皮切りとした「物語産業」の誕生により大きく下がることとなる（小林 1997: 56-57）。また同年に福山が考案した、記入式で自分史を作成できる『自分史マニュアル　メモリーノート』、これを携えた「自分史作り方教室」の全国各地での開催によって、自費出版される自分史だけでなく、高齢者向け・一般向けの自分史講座の増加というかたちで、自分史への一般の接点は拡大した。こうして 1980 年代、自分史はひとつのブームとなるとともに徐々にその枠組みを広げていく [3]（小林 1997: 56-64）。

1990 年代になると、記録を残すことを目的とするのではなく、年祝いや定年退職を機に、人生をふりかえることを動機とする自分史の出版が増加する（小林 1997: 126-128）。また、この時期には書き手の中心が 60 歳代（自分史作成当時、1930 年代生まれ）に移ったことから、戦争の経験は子供時代の記述の一部として綴られる程度となった（小林 1997: 127-128）。書き手の変化としてはほかに、女性による自費出版の増加も指摘される（小林 1997: 126-128）。

さらに 2000 年代、インターネットの普及によって自分史は新たな展開を迎える。自分史の執筆と出版を支援するサービスや、オンライン上での自分史作成サービス [4]、SNS で自分史を綴る動きがみられるようになったのである [5]。書籍などの紙媒体についても、必ずしも時系列的な記述方法をとるのではなく、また俳句や短歌、写真を多く採用するものなど、多様なかたちで自らの人生を表現するものが生まれている [6]（小林 2017: 493）。ま

---

[3] 自分史ブームを支えたものにはほかに、福山が 1988 年に開始した自分史の回覧読書システム「本の渡り鳥」がある。「本の渡り鳥」は、書き手の身内や友人だけでなく、広く読まれるものとして自分史を位置づける役割を果たした。くわえて、感想文ノートを介して読後の感想を書き手に還元する仕組みも内包していたことから、自分史をめぐるコミュニティとしても機能した（小林 1997: 126-128, 163）。

[4] インターネット検索エンジンである Google での「自分史　出版」の検索結果は約 12,200,000 件、「自分史　作成」は約 11,900,000 件である。また本研究で自分史としてあつかう対象ではないが自分史の執筆を代行するサービスおよびそれへの関心も高いのか、「自分史　代行」での検索結果は約 739,000 件である（2018 年 11 月 18 日時点）。そのほか、スマートフォンでも自分史が作成できるアプリの提供も 2010 年代半ばから始まっている。

[5] 2018 年にインタビューを行った日本自分史センター（愛知県春日井市が運営）の職員は、自分史が書かれる媒体の多様化のために全国の自分史サークルや個人から自分史やそれにまつわる書籍、冊子が寄贈される自分史全体の把握がより難しくなっていると語った。

[6] 橋本が主導したふだん記には、一貫性をもって記述する自伝の形式をとるものだけでなく、個人の追憶を統一せずに書く回想記や詩によって自身の半生を描く形式をとるものも多い。

た公募形式の自分史作品の表彰制度 [7]や、自分史の魅力を広めることを目的としたイベント [8]が日本各地で開催されているほか、短編の作品を公募し作品集として刊行する事業 [9]を実施する団体も登場した。新聞や雑誌への投稿も自分史へのひとつのアプローチであるとみることもできるだろう。また、自己分析の一環として学校教育現場に自分史学習を取り入れる動きもみられ、さらに終活、エンディングノートなどの死を前提として自らの人生の回顧を提案する諸活動にも関心が集まっている。

以上のように、とりわけ 2000 年代以降の自分史の多様化は、書き手の自分史への認識や位置づけ、自分史への取り組みかたにも影響を及ぼしていることが想定される。一方で、自分史がこれまでの人生を回顧しまとめあげる、ひいては自らの老いと積極的に対峙する作業をともなうものであることは共通している。

このことをふまえて、本研究では、自分史を書くという実践に焦点を当て、自分史の書き手が生きている老いの一端を探ることを目的とする。事例とするのは、2010 年に行った沖縄県都市部のフィールドワークで得た、自分史同好会に参加する 2 人の老年者である。なお、事例でいう自分史には、「“自分史”を冠する趣味講座や教室、あるいは日常生活のなかで書かれた、ある個人が自らの経験を主軸としてまとめた文章作品」、つまり、自分史と聞いて想起されるような、自らの人生経験を時系列的かつ網羅的にまとめて自費出版された形態のものだけでなく、人生の一時期に焦点を当てたり、テーマを絞るなどした短編や、書店に流通しない冊子や文集の形態をとるものも含むことを、先に断っておく。

２．老年者 [10]による自分史に関する先行研究と本研究の方法

老年者が書く自分史に関する日本の研究 [11]には、自分史の記述を歴史・地域史と比較検

---

[7] 北九州市が主催する北九州市自分史文学賞（2014 年度からは林芙美子文学賞）、日本自分史学会の主催による日本自分史大賞などがある。北九州市自分史文学賞は日本国内をはじめ海外在住の日本人からも作品を募集し、毎年 400 点前後の応募があった。林芙美子文学賞は自分史作品に限らない文学賞であり、優秀作品は朝日新聞社が出版する『小説トリッパー』に掲載される。また同市には小中学生を対象としたノンフィクション文学賞も設置されている。

[8] 自分史の魅力と活用法を伝え、自分らしく生きる人を増やすことを目的とする自分史活用推進協議会が実施していた自分史フェスティバルなどがある。自分史フェスティバルは 2013 年から 2017 年まで、東京を起点として全国で開催された。

[9] 日本自分史センターが刊行する『自分史作品集』などがある。『自分史作品集』の刊行は日本自分史センターの発足にともなう記念事業として始まった。初年である平成 12 年（2000 年）刊行の『わたしが輝いた日』には投稿された作品全 67 編が収録された。以降毎年テーマを変えながら年一冊の刊行を続けている。

[10] 本研究では、高齢者という語が政策的に用いられる状況を鑑みて、とくに社会政策面においては「高齢者」という語を、そのような意図をもたない場合には中立な語として「老年者」を使用する。

[11] 海外での自分史研究に類するものとしては、人生の思い起こし（人生回想）やそれが基本的に他者によって記述された「人生物語」を分析の対象とするバトラー（1963）やクローセン（2003）の研究、人生史を量的データとしてあつかうブルックナー＆マイアー（2003）

討する歴史学的視点、自分史がどのような目的意識のもとに書かれるのか、また自分史が書き手にどのような役割を果たすのかを探る自己論的視点、自分史作成を目標に掲げる講座・教室などのコミュニティに着目するもの、とくに著名人の自叙伝を社会状況や歴史に即して分析するものがある。ここでは、本研究の目的にかかわる先行研究として、自己論的視点に基づく研究と自分史コミュニティに着目する研究を取りあげる。

まずは、書き手の目的意識に焦点を当てた自己論的視点に基づく自分史研究である。小林は、自分史（＝人生のストーリー）について、それが生まれてくる社会的な背景と、人生のストーリーと個人との関係について検討するなかで、自分史を書く動機を「自分自身の人生をふりかえること」と「人生を記録し誰かに伝えること」に整理する（小林 1997: 77-90）。

「人生をふりかえること」を動機とする自分史は、自らの人生の経験と積極的に向き合い、人生を再評価するための自分史である。とくに、明るい、プラスの経験のみでなく、困難な経験をも文章化することで、それを再整理し、人生を再評価する機能を、この自分史はもつ（小林 2017; 杉座 2017; 菅沼 1998, 1999）。これに対して、記録し残すこと、伝えることを動機とする自分史は、「自らの経験を『伝えたい』という強い動機」（川又 1999: 11）のもとに書かれるものであり、「ふりかえる」自分史よりも子や孫、未来の読者などの伝える相手の存在を強く意識する（小林 1997: 90-95）[12]。

とくに、どちらの自分史の記述にも戦争体験や家族の喪失などのエピソードがたびたび登場することが、自己論的視点に立つ研究では重要視される。こうした経験を文字化し、発表するには葛藤をともなうが、それを乗り越えることで、ネガティブな経験を一流れのエピソードとしてとらえなおし、意味づけする役割を自分史は果たすのである（小林 2017: 486; 菅沼 1998）。自分史作成のマニュアル本・ガイド本における「『自分の人生はなんだったのだ』という問いへの答え」（立花 2013: 11）、「自分という個別の存在が確かにある年月・・・この日本の風景のなかで生きてきたという生存の証」（三田 2012: 7）といった記述を参照しても、自分史を書くことはもとより自分の再認識、自己認識をともなう行為であるといえるだろう[13]。

また、老年者にとって自分史を書くことは、自らの老いを自らのなかに位置づける機能ももつ。たとえば田名場は、個人の人生に生じたライフイベントを地域や社会全体の歴史と重ね合わせながら語ることによって、自分史の書き手が自らの老いを相互作用的に内面化していくことを指摘する（田名場 1998）。さらに、老いの自覚が自分史にとりかかるきっかけとされることもある。たとえば家族の死や長寿祝いなどを体験することで、自らの人生の残りを意識し、自分の経験を記録し残すことへの関心が高まることが、小林によっ

などの研究がある。またライフストーリーの書き方、ライフストーリーのインタビューの方法を解説する研究もある（アトキンソン　2006）。しかし本研究では、日本社会における自分史のひとつとして沖縄の自分史を取りあげるため、これらの先行研究の整理は今後の課題としたい。

[12] 伝えることへの関心の高まりは、近年、老年者の経験を子や孫へと伝える機会が減少していること、直接口述で伝えにくいと考える心情も影響している（川又 1999）。

[13] これを発展させ、自己の経験をふりかえり、整理し、記録する自分史作成の作業を自己分析の一環とする「未来志向の自分史」を大学教育に取り入れる動きも生まれている（杉座 2017）。

て指摘されている（小林 1997: 87-90）。老年者にとって自分史を書くことは、年を取ることのリアリティと切り離せない行為でもある（田名場 1998）。

以上のように、書き手の目的意識に注目して整理すると、自分史を書くことは非常に内省的で個人的な実践である一方で、自分史講座や教室、自主サークルなどの自分史コミュニティが自分史に果たす役割も大きい。たとえば小林は、自分史コミュニティを「『人生の物語』を生み出す共同体」（小林 1997: 32）と表現する。というのは、自分史コミュニティでは、文章を書く技術の向上よりも人生のストーリーを活字化し作品としてまとめることが重要視されるためである[14]。また、作品となった文章をほかのメンバーが読み、評し、感想をよせるという書き手と読み手の関係性は作品化を継続的にうながす役割も果たす。

また、小林は自分史を指導する立場にある「第二の生産者」が自分史コミュニティに果たす役割についても整理している（小林 2017: 492-493）。第二の生産者は、国文学者や編集者といった、書くことのスキルをもった者が務めることが多いが、そうしたキャリアや彼らの指導による書く技術の習得・上達自体が、自分史コミュニティにおいて自分史を書くことをうながすのではない。重要なのは、たとえば第二の生産者が自身のネガティブな経験をコミュニティで共有することなどから形成される、コミュニティ内での互酬的なやりとりであり、そのなかから生み出される第二の生産者とコミュニティメンバーとの信頼関係なのである（小林 2017: 482-493）。

以上の研究は、自分史を書くことが書き手の自己の再認識や人生の再評価、書くことによる人生の経験の肯定化をうながすという書き手に対する自分史の機能や、自分史コミュニティが自分史を書くことに果たす役割に重点を置いている。一方で、この視点のみでは書き手個人の老いのありようを読み解くことは難しい。たとえば、書き手はどのように老いてきて、どのように過去をふりかえり、それをどのように整理するのか、その整理が今の彼らにどう生かされているのか、などという、書き手個人の老いを前提とした自分史への取り組みに対する具体的な検討は、これらの研究視点のみでは十分ではないのである。

このことについて本研究では、老年者の加齢意識について議論した医療人類学者のカウフマンによる、老年者によるライフヒストリーの研究を参照したい（カウフマン 1988）。カウフマンは、老年者のライフヒストリーにおける「テーマ」は、自らの人生体験を解釈・位置づけるのに重要な意味をもつこと、テーマはその老年者が暮らす歴史的・地理的・社会的状況、日常生活、社会の価値観などにも特徴づけられることを指摘している（カウフマン 1988: 20-27）。本研究で事例とする沖縄で発表される自分史にも、後述するように、戦争の体験を記録し後世に伝えることが重視されるという傾向がある。この地域的特徴をふまえたうえで、それぞれの自分史に書かれるテーマに注目することで、自分史への取り組みの個別性をより具体的にすることができると考えるのである。

以降では、まず沖縄という地域が抱える歴史的背景を鑑みて、沖縄社会において発表される自分史の特徴を確認する。そのうえで、自分史を書くことが書き手にどのように意味づけられ、自分史を書くなかで書き手はいかに自らの老いと向き合うのかを検討していく。

---

[14] 一方で日本自分史センターが全国から公募し発刊する『掌編自分史作品集』の採用に当たっては、記述する技術、読み手を意識した記述の技術を重視している。また自分史講座や自分史友の会などで自分史の書き方を学んだ結果、書かれた自分史の方向性がある程度定まる可能性の指摘もある（川又 1999）。

３．沖縄の老年者による「自分史を書く」実践

この節では、自分史同好会参加者へのインタビューの結果を中心に記述していくが、事例に入る前に、日本本土とは異なる歴史をもつ沖縄における自分史、とくに 2000 年代以降に老年者によって書かれた自分史の特徴を確認しておく。

沖縄の老年者による自分史は、2000 年代に入ってもなお戦争の体験をあつかうものが多い（内田 2003; 宮城 2010; 神谷 2011; 大城 2014 など）。書き手の中心は、沖縄戦やそれに続く米軍統治という経験を共通してもつ世代であることから、これらの経験を記録に残し、子・孫世代に伝えたいと考えることが自分史を書く動機になり、その記述が自分史の大きな部分を占める傾向にある[15]。たとえば、戦時に部隊に所属していたり、少年兵部隊である鉄血勤皇隊、ひめゆり学徒隊などに動員された経験、民間人として経験した空襲や戦後の苦難について記述した書籍が多く刊行されている[16]。地域社会の特有の歴史のなかで経験された個人的な体験が自分史に書かれることは沖縄の自分史に限らないが、こと沖縄の自分史については、個人が地域共同体に共通の経験をふりかえることを通して個人の歴史が共有され、またそれによって地域の共同性が維持される「記憶の共同体」としての側面が強いことが先行研究から指摘されている（小林 1997: 102-124; 天野 2006: 191-202）。

また、戦争体験を記そうとする活動は個人的なものに限られない。たとえば那覇市史は市民の戦時・戦後の体験を、公募原稿、聞き取り、座談会の形式で掲載している（那覇市企画部市史編集室 1974, 1981）。ほかにも新聞社が老年者の戦争体験、戦後の経験談を募集・取材することも多く、紙面掲載を経たのちに単行本として出版されるものもある。しかしこの場合、書き手が記者であるなど語り手と書き手が同一でないものもあること、また戦後社会における政治性の強い記述も含まれることには留意すべきだろう。

さらに沖縄の自分史に特徴的なのものとして、門中会による個人史の出版があげられる。これは医師や教員などを務めた故人の人生経験について、父系親族集団である門中がその名誉を周知させるために出版するもので、子や配偶者によって書かれるものが多いため、本研究が想定する自分史とは異なる性質をもつ。また長寿祝い[17]で配布するために本人や家族が自分史を書き、出版することもある。とくに 88 歳のトーカチの祝い、97 歳のカジ

---

[15] 一方で、戦争体験者がさらに高齢になったことで、最近は闘病体験や介護体験を記録するものも増加しているようである。

[16] とくにひめゆり学徒隊に関しては、ひめゆり平和祈念資料館において元学徒隊による講話が語り手の高齢化により終了したこともあってか、元学徒隊による自分史の出版が相次いでいる（島袋 2018; 本村 2016 など）。

[17] 沖縄の長寿祝いは 12 年を周期とする生年祝いであるトゥシビー、88 歳に行われるトーカチ、97 歳に行われるカジマヤーなどがある。トーカチやカジマヤーには多くの人々が祝いに駆けつけ、カジマヤーでは地域をあげた祝宴が催されることも珍しくない。これらの儀礼は老年者への敬意に基づくものであるのはもちろんのこと、長寿者にあやかるという意味合いが大きい（那覇市企画部市史編集室 1979: 620-625）。

マヤーの祝いでは招待客に配布されることも多い[18]。

3-1. 事例――老人憩の家・自分史同好会の概要

自分史同好会は、月に 1 回、土曜日の午後に N 市の高齢者福祉施設である老人憩の家の小会議室で行われる。同好会は 2005 年に発足、参加者は 2010 年時点で女性 5 名である。参加者はこれまでの経験や思い出、昨今心に留まったエピソードをエッセイ形式でまとめ、毎回発表することになっている。なお、この講座は 2011 年に規模縮小のため、短歌同好会に吸収合併された。

以上のような運営形態であるため、私が見学できたのは 2010 年 8 月の回のみであった。この回の流れは以下のとおりである。

開始時刻を過ぎると、講師が待機している小さな会議室に参加者のうち 3 人が集まる。室内に入ると参加者は誰ともなしに雑談を始める。ある参加者が体重管理の必要性について語ると、「年寄りは痩せなければ」とみな賛同する。そこから出産と老化による体形の崩れへと話は進行する。「30 歳のときには 3 人の子供がいた」とある参加者が語ると、子育ての苦労へと話は移り、夫が医師であるという参加者が「内助の功」と評されると、彼女は「（夫が）医学部のインターンのころは収入が少なくて。（中略）今は息子が病院に勤めているけど、足りないのは嫁」と場を沸かせる。講師も雑談の場に入っており、参加者に問いかけ、ときには話題を提供する。そのころ、ひとりの参加者が遅刻ながらも入室する。彼女によれば、もうひとりは模合[19]でもう少し遅くなるという。

ひとまず利用者が集まったため、講師は場を簡単に取りまとめ、参加者が「これまでの歩みについて」記述してきたものを音読するよううながす。ここで「あくまで品評ではない」と講師は私に強調する。この「音読」について、参加者らは最初は「ボケ防止」だと思っていたと私に語る。参加者のひとりが「昔の修身は音読したらまる覚えだったのに」などと話を継ぎ、場は常に和やかな雰囲気で進行する。発表は全員が行うのではなく、この回で発表したのは 1 名のみであった。「書いてきた人が（発表）する」のだと、参加者は私に語った。

このように、自分史同好会では短い文章をもちより発表を行うが、講師が強調するように文章の添削や内容への助言は行われず参加者同士で感想を出し合うにとどまる。

後日、自分史同好会参加者に対して、自分史への思いを自由に語ってもらうことを目的とした個別のインタビューを依頼した。以下、インタビューに応じてくれた 2 人の事例を紹介する。

---

18 実際に、調査対象となった自分史同好会に、医師である夫のトーカチの祝いに合わせ自らの自分史を作成・配布した参加者がいた。彼女の自分史はハードカバーで製本され、夫の写真や一族の集合写真も合わせて綴られていた。

19 沖縄社会にみられる相互扶助的な金融システムである。冠婚葬祭などまとまった金銭の支払いが必要な機会における経済的手助けだけでなく、知人・友人同士の親睦的な意味合いをもつ場合もある（那覇市企画部市史編集室 1979: 315-320; 岡野 2008: 502）。とくに、移住者や移民が移住先での不安定な生活状況にあたって、同郷者同士で模合を実施し、金策にあてることはよくみられる。

3-2. I さん（70 代・女性）

I さんは沖縄本島南部出身で、幼い頃両親を亡くし、オジ夫婦に育てられた。「父は戦争前に亡くなり、母と祖父は屋敷の防空壕に逃げたが、部落にガソリンをまかれ火をつけられて即死した。・・・母と避難したほかの兄弟は母の死をみているはず。自分と妹は山に避難して、家が焼かれるのをみた。頼れるのは自分だけだと、幼い姉弟を残してはいけないと思った」「両親がいなかったので、オジに引き取られ、芋を育てないといけなかった」。I さんは「勉強したいという気持ちはたくさんあり、夜通し（勉強）してでも負けたくない」と思うほど勉強に熱心であったが、オジ夫婦の世話になる兄弟たちの最年長としての責任感と、青空学級の定員に入れなかったために、小学 6 年生で小学校を辞めざるを得なかったという。

20 歳で同郷の夫と結婚後、1967 年から現在まで N 市に居住している。夫とは死別しており、子は婚出した娘ばかりであるため、現在はひとり暮らしである。

小学校に満足に通えなかった I さんは、結婚後から数多くの習い事をしてきた。「夫の理解があったので、時間があったら洋裁や生け花、料理、ペン習字、書道を習っていた」。しかしながら、自分史にはもともとは関心がなかったという。

I さんが自分史同好会に参加した直接のきっかけは、友人の自分史を読んだことである。「もともと自分史というよりは文章がうまくなりたかった。こういう同好会に入っていればうまくなるか、と思って」という I さんは学びへの意欲が強く、自分史同好会参加以前から多くの生涯学習教室に参加していた。そのなかに文章教室もあり、ここで夫の年忌をテーマとしたエッセイを新聞に投稿し、採用されたことがあるという。その内容を、I さんは記事のスクラップを読み返しながら、次のように私に教えてくれた。「1 月 12 日は夫の 5 年忌だが、私は風邪気味だった。正月料理は冷凍でストックしてあるが、お供えが気になった[20]・・・（中略）・・・長女は（彼女の）夫と子と長いお祈りをした。次女は理論家なので、線香をあげて『あの世はどうか』でおしまい。でも、主人も形式的なことは好きではなかったし、『水入らずで（過ごせて）よかったね』と思った」。当時通っていた文章教室の講師が採用を喜んでくれたこともうれしかったという。この経験から文章を書くことへの関心が高まり、また同じ憩の家を利用する友人が発表したという自分史を読ませてもらったことから、I さんは自分史という文章表現に関心をもったのだという。自分史同好会への参加に加えて、文章を書くために市内の老人福祉センターでパソコンの講座を 70 歳から受講し、1 年がかりでワープロソフトの操作を学んだ。その後も何度か新聞に文章を投稿し、掲載された記事は、上述のものと同様ファイルに綴じて管理している。

自分史を書く実践およびそのなかでのテーマの選定に注目したうえで見いだされる I さんの事例の特徴は、ひとつに技術上達に強い関心をもって取り組んでいることである。そのために、毎回会で文章を発表することを目標としているほどであるが、自分史同好会は講師が指導を行わない方針をとるため、これを不満に思っている。「先生から学ぶことはない。ただ自分たちが学ぶ」。この方針のため、入会希望者が見学に来ても参加に至らないことにも苦言を呈した。「様子をみにきて、『（指導がないから）なんともならん』と辞めてい

[20] 沖縄では旧暦 1 月 16 日をグソーヌソーグヮチ（後生の正月）とし、墓参りし、ごちそうを備え祝う慣習がある（那覇市企画部市史編集室 1979: 515-556; 名嘉真 2008: 182）。

く。男性（の参加者者）もひとりいて、文章が上手だったが、（添削をしない）あの様子をみてから、上達がないと思ったのか辞めてしまった・・・。とても上手な人たちがいるので、ちょっと添削つければ（いいと思うのに）」と I さんは語っている。

また、I さんは自分史を書く理由だけでなく、すでに書かれた自分史についても、学びや努力が大切だという考えと結びづけて説明する。たとえば、上述したような幼少期の経験や戦争の体験をはじめてまとめた小冊子である『シンメーナビー[21]』について、I さんは次のような語りを加えた。「自分は結婚よりは勉強が好きだった。中学を出てもそうだった。田舎では、周りは毛遊び[22]をしていたが、自分は無頓着だった。繕いものや読み書きが好きで、私が外に出ると『雨降らんかね』と言われるくらいだった・・・しかし、一生懸命勉強しても畑に行かされる。オジオバに迷惑をかけてはいけない、と冷静なところがあった」。I さんにとって『シンメーナビー』は、単に幼少期を記録したものではなく、現在までいたる学びへの強い関心や向上心の根底にある体験を明示する意味ももっていることがうかがえる[23]。

さらに、ただ人生の経験を記録するのではなく「感情を書くこと」を重視していることも重要である。I さんは夫の年忌などの思い出や、日々の隣人とのやりとりなどのテーマを好んで取りあげている。これは自分史同好会を紹介してくれた友人の文章の影響であるという。「その人の本は、知識でなく心を書いていて、心をうった」。とくに、その友人が書いた娘が嫁ぐ際の母親の心情を綴った友人の文章を読んだ際には、「自分は（娘を嫁がせたとき）そうした心境になれなかったので、卑下してしまった」ともいう。それでも「私は私と考え直し」、また啓発本の文章や信仰しているカトリックの教えを引用しながら「物事は最後までやり遂げないと（いけない）」と思うようになったのだという。実際、はじめてエッセイが採用されたときには「思いは努力すれば実るのでは」と強く感じたという。続けて、「心がけているのは、もっと内面、知恵をもっと磨かなければ、ということ」とも語った。

3-3. S さん（80 代・女性）

S さんは戦前から N 市内に居住し、2010 年で 81 歳になる。夫とは死別しており、2009 年、夫の 33 回忌を迎えた。現在は独身の長男と 2 人暮らしをしている。

沖縄戦時、第一高等女学校（以下一高女）の学生だった S さんは、市内の製菓工場に動員され、黒砂糖で金平糖を作っていた。「朝 7 時ごろボンボンと音がしたので、演習かと思いつつ不審に思っていたところ、低空飛行する飛行機をみた」。これは空襲、と思い隣の空き家へ避難したという。その時の様子を S さんは次のように語る。「高射砲、焼夷弾。バラックは崩れ、猫が顔を出す。そこに焼夷弾で夕方まで燃え、焼け野原。昼は機銃…」。

---

21 沖縄の調理器具で「四枚鍋」の意味。I さんは自らの幼少期を象徴するものとして、日々芋を炊いたというこの鍋の名前を自分史冊子のタイトルに採用したという。

22 未婚の青年男女が夜間に野外で楽しむ集団的交友の一形態。毛遊びで意気投合した男女が結婚に至る例も多かった（津波 2008：515）。

23 I さんは現在も「学校に行ってないから、ボケ防止云々ではなくもっと賢くなりたいと思って」多様な趣味活動、また長年信仰するカトリック教会でのボランティアに取り組んでいる。

その後沖縄本島中部に移り、1 か月を過ごす。そこでも女子供の避難命令が出ると、本島北部に移動した。1945 年、S さんは学校に戻り、寮に入る。しかし一高女が空襲で爆撃を受けたため、S さんは命からがら貨物駅まで向かい、母親・兄弟と合流、最終的に本島北部に疎開した。そこで「盗みを働きながらも生活を続けた」が捕虜になったという。これらの経験は、自分史のひとつに記されている。

戦後は一高女としての経歴を生かし、貿易庁や民間の貿易会社でのクラークタイピストをつとめた後、一時上京し美容の技術を学んだ。その後 N 市に戻り、夫とともに美容院を 60 歳まで経営した。子どもが成人し家を離れた後、地域に世話になったという気持ちから、地域に対する「恩返し」という念が強くなった。「仕事ばかりやっているとできない地域のことをやろうと（思った）。婦人会とか、公民館にも行ってみたい。いろんなものにチャレンジしたい。経験としていいんじゃないの？」。その一環として、英会話やワープロ、墨絵などの市民講座や高齢者向けサービスに顔を出すようになったという。また、2010 年時点では居住する地域の自治会長をつとめており、地域の行事や祭祀にも積極的に関与している。

S さんが自分史に取り組むきっかけとなったのは、新聞のコーナーである「人生 80 年リレーエッセー」への寄稿である。書くことを趣味に生きたい、という友人に勧められ、一高女の同級生 3 名で「これからの私」を綴った。「書いてみると、書きたいことがたくさんあることに気づいた」という。この経験から、市内の別地域の公民館で現在の同好会講師がつとめる自分史講座を受講し、初のエッセイ集を書きあげる。

以降、いくつかの自分史講座に参加し、すでに何冊かの簡易な冊子を作成している。また、息子が新聞社に勤めていることから新聞への投稿も意欲的に続けており、S さんが一高女に入学して 50 年目に開かれた同窓会でのエピソードなど、一高女をテーマとした文章が何度か掲載されている。I さんと同様、S さんも採用された記事はファイルに保存しており、同級生とそれぞれの文章を読みあい、感想を話し合うこともあるという。

以上のように、S さんの自分史の取り組みの特徴は、一高女出身であるという経験が如実に表れていることである。彼女は上述したタイピストをしていた当時の出来事や日本復帰前の沖縄の貿易商をテーマとした文章も書いているが、いずれも一高女出身であることを背景とした内容である。一方、老後の活動についてはインタビュー時点では文章としてまとめていないという。

４．考察

事例からは、2 人にとって自分史を書くことが、これまでの人生をふりかえる作業であるだけでなく、老後を有意義化するための手段であり、老いた現在の暮らしに活用されるツールでもあることがわかる。このことについて順にみていこう。

I さんは幼少期に「学校に行けなかった」経験から、現在まで学びに強い関心をもち、さまざまな趣味活動に取り組んできた。その学びの一環として自分史がある、という態度

が、インタビューでは強く主張される。このことからは、I さんにとっては自分史を書くことは、先行研究が指摘するような苦難の経験を伝えることに力点を置いた記録、または過去をふりかえることによる人生の再評価の役割を果たすものとしてだけでなく、老後もなお学び続けようとする姿勢を表明する、またその姿勢を貫くための手段であることがうかがえる。言い換えれば、自分史への語りから明らかになった I さんの学びへの関心は、彼女が自分史を書くことの動機であり、かつ自分史のみに限定されない、彼女の生きる目標でもあるといえる。

また、I さんは自分史を、自己の経験や人生を文章技術でもって書き綴るものとしてだけでなく、自己を表現し、内的な成長をはかるツールとしてもとらえていることにも注意を払いたい。I さんは、文章を書く技術の習熟を目指し自分史に取り組む一方、そのテーマに夫の年忌や隣人のふるまいなど日々の生活のなかにある情緒的なエピソードを好んで取りあげる。これは結婚する娘への心情を文章に書きあげた友人への共感だけでなく、彼女が好む啓発本や長年の信仰心から生じる「内面を磨くこと」「物事をやりとげること」という向上心からも説明できるだろう。

一方 S さんによる自分史の特徴は、上述したように一高女としての経験が自分史を書くことに強く影響していることである。たとえば自分史に取り組むきっかけとなった新聞への寄稿も一高女の同級生とのリレーエッセーであったし、一高女としての疎開や空襲の体験、同級生のエピソード、現在の同窓会での活動など、彼女の文章の多くは一高女の学生であったという経験に基づいたものである。一高女はひめゆり学徒を輩出したことから、現在も沖縄戦の文脈で語られることが多いテーマであり、証言集の出版や沖縄戦に関するイベントが繰り返されることによってその政治性は強化され続けている。この意味で、S さんの一高女としての語りも、自分史としてだけでなく、戦後社会における公的・政治的な物語へも回収されるかもしれない。とくに、リレーエッセーは新聞社がもうけたコーナーであり、それに合わせて文章を書いたという経緯は彼女の自分史への態度に影響を及ぼしている可能性がある。しかしそれをよしとするのもまた、一高女出身であるというアイデンティティへの S さんの誇りであるといえる。

そしてなにより、S さんが自分史を通して一高女の同級生との旧交を深めていること、「これからの自分」を考えるツールとして自分史を用いていることは興味深い。つまり、一高女出身であるという人生の経験を再確認するだけでなく、一高女時代から続く交友関係、ひいては一高女としてのアイデンティティを維持・強化するツールとしても自分史が活用されているのである。

５．まとめと今後の課題

本研究では、自分史を書くことを、自らの人生を文章化するという現在の実践に焦点を当てて検討した。

今回取りあげた 2 人は、自分史を書く時点でこれまでの人生をふりかえろうとする大き

なきっかけに直面していたわけでも、それを次世代に伝えるために記録するというような切実な目的意識を有していたわけでもない。2 人がなぜ、どのように自分史を書くのかについて、本研究では I さんにとっての自分史は、夫を亡くし不安定な老年期をなお成長の機会とするものとして、S さんにとっては老いのなかで立ち戻る先としての一高女を再帰的に強化する役割を果たすものとして取り組む対象として整理した。I さん、S さんのどちらにとっても、自分史を書くことは自らの人生を確かめる行為であるだけでなく、老いた今とこれからの老いを生きるなかでの手段でもあった。この検討は、自分史を書くことを、自分史に書かれるテーマや書き手の現在の生活の中での自分史の位置づけと関連づけることで可能となった。

本研究では、現代社会における老いへの人類学的アプローチとして、自分史を書くという実践を取りあげた。世界的に高齢化が進行する現在、老後はただ与えられるものではなく、個々人が積極的に取り組まねばならない課題へと変貌している。そのような状況で、老いはどのように生きられているのか。この問いに答えるには、今回取りあげた 2 人の事例のみでは確かに不十分である。しかし、老年者が自らの人生をふりかえり、それを書き表すという実践のなかに、人生の蓄積からなる老いを再確認し、これからの老いを生きていくささやかながらも戦略的な実践を見出すことはできたのではないだろうか。書き手の数だけあらたな様相をみせる自分史について、今後は分析対象を広め、自分史を書くことの分析と、現代日本社会の老いの理解とを接続させる方法論の検討へと、議論を展開していきたい。

参考文献

Atkinson, R.

1995(2006) *The Gift of Stories: Practical and Spiritual Applications of Autobiography, Life Stories, and Personal Mythmaking*, California：Praeger Publications.（『私たちの中にある物語』、塚田守訳、ミネルヴァ書房。）

天野　正子

2006 『老いへのまなざし――日本近代は何を見失ったか』、平凡社。

色川　大吉

1975 『ある昭和史――自分史の試み』、中央公論社。

1992 『自分史――その理念と試み』、講談社。

内田　栄子

2003 『希望に生きる――あきらめない人生』、沖縄自分史センター。

大城　勇

2014 『はざま時代に生きて』、Ryukyu 企画。

岡野　宣勝

2008 「ムエー」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也(編)『沖縄民俗辞典』、p. 502、吉川弘文館。

神谷　すみ子
2011　『戦火に追われて』、沖縄自分史センター。
川又　俊則
1999　「大衆長寿社会における自己表現の方法――自分史と＜受葬＞にみる」『現代社会学研究』12 号: 1-17。
Clausen, John.
1998(2003)　"Life Reviews and Life Stories," In Giele & Elder (ed.), *Methods of life course research: qualitative and quantitative approaches*, pp. 189-212, Thousand Oaks: Sage Publications.（「人生追想と人生物語」、エルダー＆ジール(編)『ライフコース研究の方法――質的並びに量的アプローチ』、正岡寛司ほか訳、pp. 321-358、明石書店。）
Kaufman, S
1986（1988）　*The Ageing Self: Sources of Meaning in Late Life*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.（『エイジレス・セルフ――老いの自己発見』、幾島幸子訳、筑摩書房。）
小林　多寿子
1997　『物語られる「人生」――自分史を書くということ』、学陽書房。
2017　「日本の自分史実践における「第二の生産者」と自己反省的言説」『法學研究――法律・政治・社会』90 巻 1 号: 476-494。
島袋　俶子
2018　『ひめゆりとともに』、フォレスト。
菅沼　真樹
1998　「老年期に語られる自分史と愛着スタイル（2）――老人は喪失経験をいかに語るか」『日本教育心理学会総会発表論文集』40 号: 14。
1999　「老年期に語られる自分史と愛着スタイル（3）――老人は過去・現在・未来をいかに語るか」『日本教育心理学会総会発表論文集』41 号: 313。
杉座　秀親
2017　「自分史を書く」『尚絅学院大学紀要』73 号: 18-21。
立花　隆
2013　『自分史の書き方』、講談社。
田名場　美雪
1998　「個人史と地方史からとらえたエイジングの内面化――秋田県北秋田郡合川町「母の実会」を例として」『東北文化研究室紀要』38 号: 19-34。
1999　「生活記録からエイジングの意味づけを読み取る試み」『東北文化研究室紀要』39 号: 63-80。
津波　高志
2008　「モウアシビ」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也(編)『沖縄民俗辞典』、p. 515、吉川弘文館。
名嘉真　宜勝

2008　「グショー」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也(編)『沖縄民俗辞典』、pp.182、吉川弘文館。

那覇市企画部市史編集室

1974　『那覇市史資料篇第 2 巻中の 6 戦時記録』、那覇市。

1979　『那覇市史資料篇第 2 巻中の 7 那覇の民俗』、那覇市。

1981　『那覇市史資料篇第 3 巻 7 市民の戦時・戦後体験記（戦時篇）』、那覇市。

1981　『那覇市史資料篇第 3 巻 8 市民の戦時・戦後体験記（戦後・海外篇）』、那覇市。

三田　誠紘

2012　『超自分史のすすめ』、東京堂出版。

宮城　光吉

2010　『少年兵の追憶』、沖縄自分史センター。

本村　つる

2016　『ひめゆりにさゝえられて』、フォレスト。

Butler, Robert

1963　"The life review: An Interpretation of Reminiscence in the Aged," *Rsychiatry-Interpersonal and Biological Processes* 26: 65-26.

Erika Bruckner and Karl Ulrich Mayer

1998(2003)　"Collecting Life History Data: Experiences From the German Life History Study," In Giele & Elder (ed.), *Methods of life course research: qualitative and quantitative approaches*, pp. 152-182, Thousand Oaks: Sage Publications.（「人生データを収集すること」、エルダー＆ジール(編)『ライフコース研究の方法――質的並びに量的アプローチ』、pp. 271-311、正岡寛司他訳、明石書店。）

Keywords

Autobiography, Aging, Okinawa